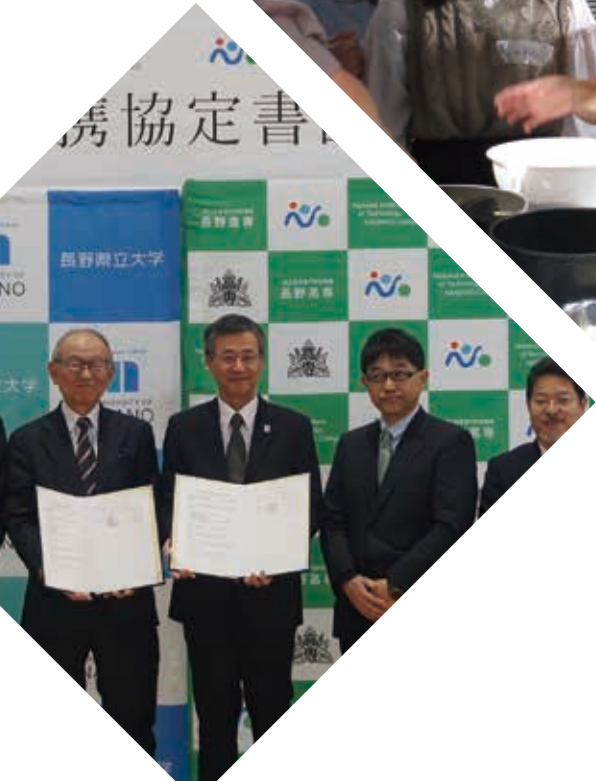


じわじわ、
挑戦するエコシステム、
ひろがる。

CSI JOURNAL 2019



Topics

鼎談

安藤理事長 &
大室センター長 &
秋葉チーフ・キュレーター

CSI の活動報告

進行中プロジェクト
地域コーディネーター活動紹介



長野県立大学
THE UNIVERSITY OF NAGANO

What is CSI??

持続可能な社会の実現を目指して

2018年4月、長野県立大学の開学と同時に立ち上がった「ソーシャル・イノベーション創出センター(Center for Social Innovation Initiatives, CSI)」は、「社会課題を生まない」「社会課題を解決する」ことに理念を持つ方が一歩を踏み出せるエコシステムを醸成し、持続可能な社会の構築に貢献していきます。

社会の新しい変化 ソーシャル・イノベーションを促進

大学内外の多様な人や知的資源、地域や企業など、多様な人々が絡み合う「オープン・イノベーション」を基本とし、社会の新しい変化「ソーシャル・イノベーション」を促進します。県内外のイノベーターやプロフェッショナルと、学生や教員、企業、行政機関、地域などを相互に結び、社会的課題を解決するための新しい仕組みやサービス、商品などの開発を促進します。

社会的課題に取り組む事業者・創業者等を支援

専任キュレーターや大学内外の専門家によるコンサルティング	信州ソーシャル・イノベーション塾 専門職向け・女性向け起業塾	事業者などへの オープン・イノベーション支援
イノベーションにつながるネットワーク促進	SDGs浸透支援	審議会・企業研修などへの講師派遣、 共同研究等の推進

地域の企業へ学生を派遣、社会人の大学へのアクセスを促進し、大学の知を地域に還元

知と実践の循環

地域におけるイノベーションの実像をロールモデルとして学生に提示し、次世代のイノベーターを養成

創業者・経営者付き長期インターンシップ・プログラムの開発	問題解決型授業(Problem Based Learning)の連携先の開拓
社会人ボランティアのティーチング・アシスタント発掘	コラボ公開講座、経営者トークライブ (学生と県民がともに学ぶ公開講座)の開催

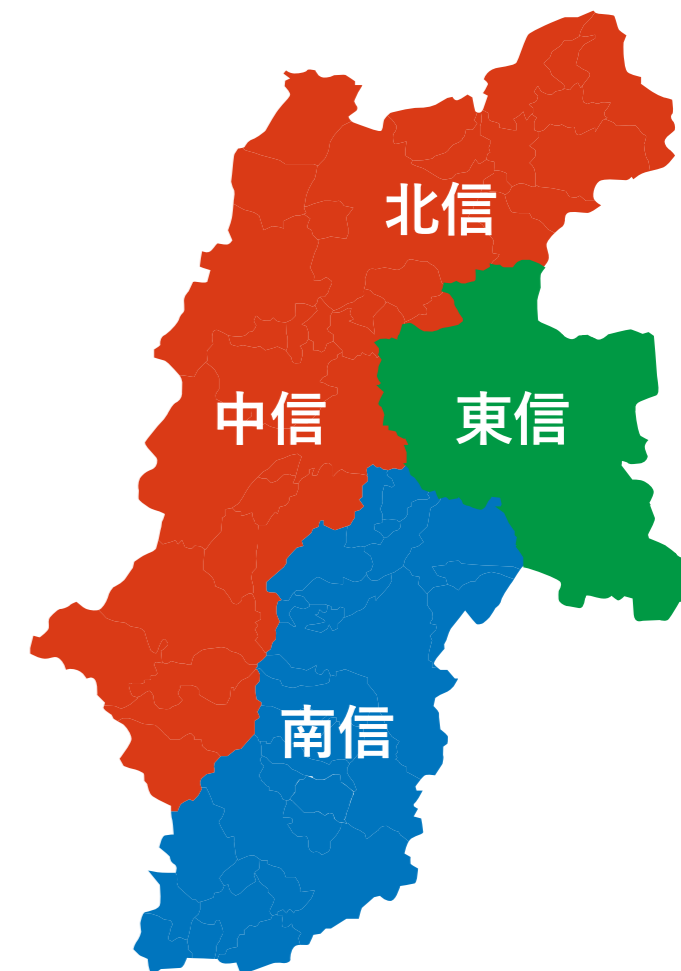
大学教育との連携

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



社会課題解決に向けてのコーディネート

社会課題解決に向けて多くの皆さんの相談に応じます。各地域に常駐する地域コーディネーターを相談窓口、大学やアドバイザー・メンバー、事業者、行政機関などとの接点を見つけ、CSIは黒子役として、皆さんを結び付けるコーディネートを行います。



地域コーディネーター (2019年度)

県内の各地域で活躍する地域コーディネーターが、事業者や企業、自治体や地域とCSIを結びます。

- 瀧内 貫 (北信・中信) 大宮 透 (北信・中信)
- 副島 優輔 (東信) 森本 ひとみ (南信)

CSIへのアプローチ



挑戦するエコシステム



アドバイザー・メンバー

県内外の社会起業家、専門家にアドバイザー・メンバー(adv.m)を委嘱しています。CSIは社会課題解決に向けて事業者や企業、自治体とadv.mをつなぎます。

秋山 怜史 一級建築士事務所 秋山立花 代表 (横浜市、京都市) 母子居住支援、建築	斎藤 幸一 有限会社アップライジング 代表取締役社長 (宇都宮市) 就労困難者の雇用	ポチエ 真吾 Impact HUB Tokyo(株式会社 Hub Tokyo) 共同創業者&取締役(東京都、長野県) 社会にインパクトを生み出すコミュニティづくり
井上 英之 慶応義塾大学大学院政策・メディア研究科 特別招聘准教授(神奈川県) ソーシャルベンチャー・パートナーズ東京ファウンダー	桜井 肖典 一般社団法人リリース 共同代表(京都市) 実践ビジネス講座、地域活性化	前田 展広 前田展広事務所 代表(京都市) プロジェクトマネジャー、京都市ソーシャルプロダクトMAP編集長
井上 有紀 INNO-Lab International 共同代表(長野県) 慶応義塾大学SFC研究所 上席所員	高津 玉枝 株式会社福市 代表取締役(大阪市) フェアトレード、イノベーション・キュレーター	三木 康司 株式会社 enmono(エンモノ)代表取締役(神奈川県) マイクロモノづくり
岡 勇樹 NPO法人Ubdobe (ウブドベ) 代表理事(東京都) 医療福祉エンターテインメント	但馬 武 fascinate株式会社 代表取締役社長(横浜市) ビジネス・コミュニティ・デザイナー、 社会起業家のコミュニティづくり支援	村上 草太 株式会社 X United Branding & Communication Centerリーダー(大阪市) IoT導入支援、ハッカソン等によるコレクティブ・インパクトの実践、IoT人材育成
鬼丸 昌也 認定NPO法人テラルネッサンス 創設者・理事(京都市) 海外紛争被害者支援	田中 慎 田中経営会計事務所代表(大阪市) 税理士、中小企業診断士、京都市ソーシャルイノベーション研究所(SILK)イノベーション・コーディネーター	桃原 祥文 株式会社九電ビジネスフロント部長(福岡県) 健康マネジメント
川添 高志 ケアプロ株式会社 代表取締役(東京都) 革新的ヘルスケアサービスのプロデュース	成澤 俊輔 NPO法人FDA 理事長(川崎市) 障がい者支援、社会的弱者への就労環境提供	由井 真波 有限会社リンク・コミュニティデザイン研究所 代表 (京都市) コミュニティ・デザイン
熊野 英介 アマタホールディングス株式会社代表取締役 会長兼社長(京都市) 持続可能な社会を目指す未来デザイン	西村 勇哉 NPO法人ミラツク 代表理事、理化学研究所未来戦略室 イノベーションデザイナー(京都市、東京都) 未来潮流 を捉えた戦略・事業開発、未来共創のためのマイクロ視点 調査等	渡邊 さやか 一般社団法人 re:terra 代表理事(東京都) 女性企業家支援



CSIのつくりたい未来を整理する

公立大学法人 長野県立大学

安藤 国威 理事長

ソーシャル・イノベーション創出センター

秋葉 芳江 チーフ・キュレーター

ソーシャル・イノベーション創出センター

大室 悦賀 センター長

各地で芽が出はじめた2年目

大きく育つために何ができるのか。

—CSIジャーナル2018対談のキーワードは、触媒・種・発芽でした。この1年間を振り返って、率直な感想をお聞かせ下さい。

安藤 触媒のあり方は、初年度に比べて広く深くなっていると感じます。印象的だったのは、「信州ソーシャル・イノベーションフォーラム2019」（本誌7頁を参照）の開催。行政にインパクトを与えて視野を広げ、企業や地域と一緒に話し合ったことで、より社会に対して密に働きかける動きが出てきました。

秋葉 地域に種を蒔いて芽は出た、肥料と水もあげて、2年弱経って、「さあ伸びよう！」という状態まできました。それなりの手応えも感じています。

大室 触媒や種以前に、畑の劣化を痛感した1年でもありました。超過疎地域では想像以上に地域の人の反応がよくて驚く一方、土壌の改良も必要だなと。

秋葉 県内3カ所での起業塾を通して、畑を耕していく、変えていく必要は強く感じますね。危機意識や課題の認識、温度の差は地域によって様々です。

安藤 その差こそがCSIの広がりを見せているというか。長野の実態とも見えますね。

大室 広がりといえば、次世代の経営者層と会うことで、ちょっと違う畑に踏み出せた実感もあります。誇りを持って残していける企業を育てていかないと地域経済もたない。リソースがあっても、自社のことをそう考えている企業が意外と少ないんです。年度後半は特に、触媒としてどんなサポートができるのかを考えることが増えました。

安藤 そういったリソースの多さで言えば、僕はやっぱり地方にこそチャンスがあって、フロンティアだと思います。都会や大手企業とは大きく違う、新しい発見があります。

大室 そうですね。いろんな土の畑があって、面白いものが出てくる可能性の幅は感じます。耕す大変さもありますけど。

—受け入れる側の現場は、どのようにあったら良いのでしょうか。

秋葉 地域に対して愛を持って何かしたいという人や若者は、その存在自体がとても貴重だという意識を持って欲しいです。大人が成功してきた時代と、今から彼らが成功していく時代は明らかに違いますから。大人も一緒に学び、アップデートしていくことがマストです。

大室 自己主張がきちんとできるこれからの世代を、わかってもらう必要性も感じます。そのためにも、大学というスキームで育った面白い学生を、もっと現場に送り込みたい。種を飛ばして、土壌改良です。

安藤 いいですね。シリコンバレーの学生発ベンチャーだと、学生中心にアイデアを出して、大人が知見やエンジェルマネーを持ち寄り一緒にやるスタイルを見かけます。リアルなビジネスフィールドで学生と一緒に仕事できれば、今後、雇用を考える企業にとってもウェルカムだし、面白い取り組みになると思います。

大室 彼らは素朴に、ロールモデルとなる大人を見つけたいと思っている。変化を真摯に受け止め、アップデートを示し続ける大人がいなければ、子ども達は長野からいなくなりますよ。



SDGsはビジネスのネタ集？！

キーワードからCSIが考える少し先の未来

—環境はどんどん変化していきます。1年前の常識が通用しないことも多くあります。未来を描くための確認として、あえて素朴な疑問を投げかけたいと思います。SDGsは、企業経営やビジネスにとって、どんな良いことがありますか？

秋葉 SDGsは、ビジネスネタそのものです。どの業界にとってもヒントが書かれている。本来ビジネスは、サーキュラーエコノミー（循環型経済）を無視して成り立ちませんから。事業者さんにも、「余力があるからやるのではなく、本来のビジネスに気づくためのツールとして、ポジティブな捉え方」とお伝えしています。

大室 常に複雑に変動している社会の中で、スタティック（静的）な経営からダイナミック（動的）な経営に転換する大きなポイントでもありますね。人体をつくる細胞のように、壊しながらつくることをしていかないと、経営も社会も持続できないことを露呈しているんです。従来の経営は安定した土台を前提に発展してきましたから、SDGsを通じて「変わりなさい」と宣戦布告をされたような。

安藤 ダイナミックかつバランスを取っていく必要がある、と。

大室 そういことです。

—大室センター長がいつも話されている目指すべき“エコシステム”とはどんなものでしょう。これまでのプラットフォームとの違いはどこにありますか？

大室 例えば長野にある企業も、部品の供給や人材、豊かな自然や資源、様々なリソースが繋がって成立しています。この動的な生態系こそが、“エコシステム”。誰と手を組んでどこへ行ったらうまくいくのか、常に自分で考える必要があります。そしてプラットフォームは、「この舞台に立てば踊れる」という土台です。リスク回避のための安定装置であって、枠が決められたもの。学びや自由は減りませんし、冒険も少ない。

秋葉 プラットフォームはお膳立てがされていて、その舞台に上がった人は「私は何をしたらいいでしょう？」といった反応になりがち。エコシステムは、「こういうことがやりたい！」というアクションの集合体に近いイメージではどうでしょうか。

大室 地域の中では、ビジネス、市民、政治など、いろんなテーマのエコシステムを、いろんな人が持っているですからね。その中から、全然違うジャンプした発想が出てくる可能性もある。多様なエコシステムの間を飛び歩いていられる人が、イノベーターになる人です。



—もう少し具体的に、利用する側のスタイルや、こうあったほうが良いということはあるですか？

秋葉 全ての人が“自身はアントレプレナーである”、というマインドを持つことだと、私は思います。

大室 感覚としては、「この人と一緒にやったら面白くなるかも」という直感を信じることに。そのために、自分の持つ「こうあるべき」というのを、一旦脇におけるマインドセットが重要です。要は、自分の使う言語や感情をコントロールして無意識の領域を減らす。これは、今後の大学院構想の中でも考えて行きたいトピックです。

秋葉 それはまさにCSIが大学にある意味や、教育機関としての可能性を感じる部分ですね。

安藤 マインドセットは、全ての人に必要です。「自分がどういうマインドセットをするか、世の中にどんなイノベーションを生み出せるのか」のトレーニングは、もうすでに国際基準といえますから。

安藤 もはや変化が当たり前の“常態”であって、かつ、同時多発的に起こっていますから。日本では、「イノベーションには、失敗がつきもの」と言うネガティブな話も聞きますが、イノベーションなくして組織は存在し得ないと思っています。2019年夏、世界ではISO56002として、イノベーション・マネジメントシステムが国際規格になりました。イノベーションを持続的に発展できないと、信用もない投資も受けられない。もうすでに、イノベーションを特別なことと考えるのが間違いです。

大室 そういう意味でCSIは、プラットフォームではないし、なっちはいけないと考えています。役割として、エコシステム形成のガイド役のような存在でありたい。



安藤 ローカルイノベーションは特に、そうした個々のライフスタイルに近いところから起こるイメージがあって。僕は、イノベーションのことを総合芸術のようだと思っています。

—長野という環境でエコシステムを利用する側として、考えるべきポイントはなんでしょう。

大室 人が少ないが故に里山のような超過疎地域はエコシステムが成立しやすいんです。ただ、それが単独で形になってしまうと危ない。オープンにして多様化させ、閉塞感をなくすことがポイントです。それができれば、長野県は小規模自治体が多いので、数の少なさに可能性があると思います。また、そうした現場に学生を送り込める大学も、僕はキーだと思えますよ。

安藤 変動する社会の中で、大学の持つ役割が変わってきています。CSIは、エコシステムの中で大学がどう新たな役割を果たすか、例えば、社会との接点となり、境界を超えられる存在になるとも言えるのではないのでしょうか。

秋葉 人材を輩出するだけではなくて、アカデミックと市場との行ったり来たりをもっと軽やかにしなやかにしたいですね。リカレント（学び直し）も、今はとても敷居が低くなっていますから。

クリエイティブは里山にあり 個々の夢を描くことで、多様な未来を示していく

—1年間を振り返り、CSIが今、大事にしていることが何で、その作り方、考え方を伺ってきました。最後に改めてお尋ねします。「CSIが作りたい、手に入れたい未来はどんな未来なのでしょう？」

安藤 CSIが未来をつくるというより、エコシステムにおいて、CSIはなくてはならない一端を担う存在である、と、僕は思っています。個人の興味関心を社会と繋ぎ、SDGsの実現に向けて、新しい可能性を掛け算式に増やしていきたいですね。

秋葉 ええ。CSIが作るというよりは、みんなが100年先の未来に夢を描き、実現できるようにしていきたいと思っています。CSIはそこに踏み出そうとする応援、しかも強烈な応援をするのが役割。

大室 僕は、地方だからこそイノベーションが起こせると証明したい。里山にいたことがクリエイティブの源泉になることを示していきたいです。

安藤 いいですね。「ロマンは地方にある」を、CSIが証明してくれる未来。今から楽しみです。

信州ソーシャル・イノベーション塾 第2期

マインドフルネス
(セルフマネジメント)
×
デザイン思考



2期目の今年は、望まれる人材像に必要な要素の中から、「マインドフルネス(セルフマネジメント)×デザイン思考」に集中して開催しました。講師は、アメリカで研鑽を積んだ稲垣聡一郎氏と中村珠希氏をお迎えして、開催した5か月間。

塾が目指す人材像は昨年同様「俯瞰して情報を拾い上げ、新たな未来をつくるための価値観を創出してビジネスに実装する」。型にはまりがちな自らの思考を疑い、イノベーションにつながる様々な視座を学び討論を重ね、「違うものをつくりだす」ことに取り組んだ5か月間でした。今年の塾生も県内各地から、中には2年連続受講塾生もあり、卒業後の自主的なフォローアップ会など卒業生のネットワークも広がっています。

塾長：秋葉チーフ・キュレーター
講師陣：稲垣聡一郎氏 (Transform LLC. Co-Founder and Partner)
中村珠希氏 (epiQ Co., Ltd. 取締役)
開催：2019年9月27日～2020年1月24日 (全5回)



保健医療福祉専門職を対象とした起業塾

主催者の声

起業塾では、ビジネスモデル作成と資金調達等を学びました。専門職は、想いは強いけれどお金のことに疎い、弱い。そこを埋めるためにCSIの存在が本当にありがたい。面白いのは、動き出した人が同様につぶや言葉。「動き出したらいろいろ繋がって、自然に必要なことが集まってくるんです。」熱き志を語り、共に支えあう仲間が心強いです。2020年からは毎月集まって情報交換をしていくことにしています。日本開業保健師協会長野研究会 三井洋子さん

塾生の声

自分の状態を観察する習慣

セルフマネジメントの学びを通じて、瞬間瞬間に意識を向けること、そして実践により、自分の状態を観察する習慣が身に付いた。

マインドフルネスに理解

多くの方がマインドフルネスについて理解が深まれば、地域のコミュニティはより充実したものになるのではないかと思います。

かけがえのない仲間が得られた

グループワークはチームビルディングにも効果的で、かけがえのない仲間を得られた。

自分の枠が広がった

多くの刺激を受けた。会社の中にいるだけでは知ることができなかったことを学び、自分の枠を広げることができた。

アプローチ方法を学ぶ

『自分の抱える問題をテーマ化、具体的なサービスに落とし込む』に向き合うアプローチ方法を教わりながら、試行錯誤を繰り返した。

デザイン思考を身につける

業務はもちろん、個人的なことについてもデザイン思考で考えてみたい

昨年「もやもや編」に引き続き「起業編」を、本学の宮崎教授も参加し、日本開業保健師協会長野研究会との共催で開催しました。具体的な起業に向けて1日コース全3回の塾に、県内外から専門職の熱い塾生達が参加しました。「もやもや編」からの連続受講者を中心に、長野研究会の推薦者を加えての濃密な3か月間でした。それぞれのフィールドで具体的な起業の姿を構想し、ビジネスモデルプランニングまで取り組み、起業へ向けたりアルな一歩を重ねました。

塾期間中に開催された、信州ソーシャル・イノベーションフォーラム2019の登壇者との具体的なコラガ取り組みも、ここから誕生しました。2020年には卒業生から起業者が出そうです。

起業を目指す専門職のエコシステムが醸成されてきています。



塾生の声

起業塾(もやもや編、起業編)を経て、私のもやもやは晴れている。ワークライフバランスではなく「Work as Life」で生きていく。「チャンスが来たら掴み取れ。そのために自分にとってのチャンスとは何か知っておくこと」。そんなキーワードを塾の中で学び、それを日々実践している。塾の中で自分に向き合い、時には苦しくなった。それでも仲間と共に自分自身や解決したい課題と向き合い続けたことで、今自分がどこに向かっているか、それは本当に自分が叶えたい未来か?を確認出来る。現段階では起業という形は選択していないが、私は働く事を楽しむ人生を生きており、日々充実している。人生が楽しくなった、それが起業塾の一番の成果だ。(公認心理師、女性)

地域おこし協力隊スキルアップ研修



長野県企画振興部主催で行われた「地域おこし協力隊スキルアップ研修」。昨年に引き続き秋葉チーフ・キュレーターが講師を務めました。

地域おこし協力隊の人数が全国で2番目に多い長野県。研修には19市町村、36名の方が参加されました。

昨今の長野・日本・世界の姿から、人生100年時代をどう自分らしく生きていくのか、自分で決めて主体的に主体的に生きるための手段の一つとして「起業」についての講義が行われました。集中してワークに取り組む参加者の皆さんの姿が印象的でした。

参加者の声

ありきたりの起業支援の話が未だ蔓延している中で日本や世界の現状をしっかりとりえたとともに刺激的なお話でした。

協力隊が向き合っている現実をどう見つめなおしていくかを改めて考えるととてもいいきっかけになりました。



北信地域おこし協力隊起業塾

「地域おこし協力隊起業塾」は、北信地域振興局の新規事業として開催されました。対象は北信地域で活躍する地域おこし協力隊の皆さん。自分がやりたいことを自信をもって言える自分を目指しました。叶えたい未来の自分の姿に向けて、好きなこと・得意なことを一生の「マイ事業」とするため、秋葉チーフ・キュレーターによる講義とワークで徹底的にマインドを磨き上げました。

塾生の声

3回という短い期間でしたが、起業塾へ参加したことで自分の「思い」を「形」にするためのノウハウを凝縮して学ぶことができました。あとはしっかりと事業として持続可能な形で経営できるよう、また、起業すべきタイミングに備え小さなトライアルを繰り返し、事業計画をさらに磨き上げていきます。よりたくさんの人と地球を幸せにできるよう走り続けます。



秋葉チーフ・キュレーターを講師に木曾で9月～11月に開催した「KISO女性・わか者起業塾」(全3回)。起業を志す人や主体的に生きたい人など13名の方々が受講されました。

KISO 女性・わか者起業塾

主催者の声

受講生の皆さんの熱心に取り組む姿勢から、「木曾が好きで木曾を良くしたい」という思いを強く感じました。講義後のアンケートでも、「モチベーションが上がった」「人生の行き先が見つかった」「気持ちに火がついた」等、前向きな感想を多数いただき、主催者として、とても嬉しく感じると同時に、こうした熱意のある方々と一緒に木曾を盛り上げていきたいと思いました。(長野県木曾地域振興局商工観光課 五味寛敏さん)

「起業ってどうすればいいの?」「今やっている仕事は起業とは違うの?」「何かやりたいけど何から始めればいいのか?」など、みんな何かモヤモヤを持っていたけれど、3か月じっくりと自分と向き合い、マイ事業が世の中に提供する価値を考え、将来のなりたい自分から、なれる自分へ自信を得られました。人生を主体的に生きるための道しるべとなる起業塾でした。(鎌田和紀さん、井ノ上紀子さん)

塾生の声

Pro bono

地域に飛び出す職員支援研修



昨年度に続き、今年も9月24日(火)に実施された「地域に飛び出す職員支援研修(主催:長野県、共催:市町村職員研修センター)」にコーディネーター役としてCSIが参加しました。今年のテーマは、公務員が組織を超える「越境」が生み出すインパクト。社会的・公共的な目的のために、職業上のスキルや専門知識を活かしたボランティア活動である「プロボノ」を題材に、自治体職員が地域に飛び出すきっかけづくりを行いました。

株式会社BAZUKURI 代表の藤原正賢さんの進行のもと、特定非営利活動法人サービスグラント代表理事の嵯峨生馬さんからプロボノ支援の仕組み、プロボノに参加されている静岡市職員の太田紗世さん、神奈川県職員の中川聡史さんからは実践事例を紹介していただきました。地域をよく知るからこそセクターを超えた活動はインパクトが大きくなること、そして、あれこれ考えずまず一歩踏み出す勇気を持つことの大切さを感ずる機会になりました。

信州ソーシャル・イノベーションフォーラム 2019



Network matching hint Action



CSIには、課題を生まない持続可能なビジネスを生む土壌作りが求められています。これまでCSIに寄せられたご相談は、自治体をはじめとする行政機関から多数を占めます。そこからは自治体が地域課題の現場に立ちながら、その解決に向けて日々悩みながら進んでいる姿が浮かびあがってきます。そのような現状から、CSIは、令和元年7月30日(火)、本学三輪キャンパスを会場として、主に自治体職員の皆さんを対象に「信州ソーシャル・イノベーションフォーラム2019(主催:公立大学法人長野県立大学、共催:長野県、長野市、特別協賛:日本ユニシス株式会社)」を開催しました。このフォーラムは、民間企業を中心とする地域課題を解決するソリューション・サプライヤーの皆さんを全国から多数お招きすることで、具体的な解決策を学ぶことに加え、自治体の抱える課題と解決策のマッチング及びネットワークを広げ、具体的なアクションにつなげていただくものです。



当日は、県内各地から自治体職員を中心に184名の皆さんにご参加いただき、まず三輪キャンパスのラーニングホールに集まっておられました。本学より安藤理事長、共催者を代表して長野県小岩副知事の挨拶の後、参加者に今日のゲストの皆さんの全体像を把握していただくため、ゲスト12名が連続して登壇し、5分程度に凝縮した取組内容のプレゼンテーションを一気に聞いていただきました。さらに参加者が詳細な取り組み内容を理解し、ゲストとの交流を深めるため、参加者それぞれの課題や関心に応じて、日ごろ、授業が行われている4つの講義室に分かれ、分科会形式の集合相談セッションが行われました。また、それらに平行する形で、さらに突っ込んだ質問や深いやり取りができるよう、本学では一番大きな講義室にゲストが一同に集まり、個別相談ブースが設置されました。参加者からは、「個別相談では自分と近い事例の紹介をしてもらえてとても参考になった。」「様々な企業の話が聞けて大変参考になった。」といった民間企業の問題解決力とその解決可能性を理解できたコメントだけでなく、「自分が『やりたい』と思うことをソーシャルなものにしていくヒント、きっかけを知ることができた。」といった次のアクションを具体的にイメージできた方、「自分の頭の中だけで考えているものがたいがい古い文化の枠に取まってしまう。世の中の新しい文化になじめていない、ということを感じた。」といった課題解決の当事者としての進取の精神を持つきっかけとされた方もおられ、このフォーラムを契機に動き出すであろう具体的なアクションがますます楽しみになりました。

日本ユニシス株式会社 スマートタウン戦略本部 部長 向井 剛志 さん

UNISYS

この度は、長野県立大学において「信州ソーシャル・イノベーションフォーラム2019」を開催されたことを、心よりお祝い申し上げます。日本ユニシスは、2019年2月に長野県および長野県立大学との3者連携協定を締結し、ちょうど半年の節目のタイミングで、このフォーラムにご協力することになりました。当日は日本ユニシスグループの「スマートタウン」に関する取り組みと、海外事例の一つとして「シェアリングシティ」をご紹介し、県内の行政機関や事業者、学生の皆様にも多くの関心を寄せていただくことができました。

このフォーラムでの出会いを一つのきっかけとして、日本ユニシスは、長野市において「地域共創ラボ」という取り組みをスタートしました。地域共創ラボは、“かせぐまちづくり”をコンセプトとし、持続可能な地域社会と具体的なビジネス創出を目指す取り組みで、長野県が掲げる信州ITバレー構想の実現にも貢献したいと考えています。長野県内各所で多くの皆様との事業共創を推進してまいります。

<https://smarttown.jp/>

京都市ソーシャルイノベーション研究所 (SILK) イノベーション・コーディネーター 田中 慎さん

フォーラムでは、京都市とSILKがどのようにソーシャルイノベーションの広がりを進めてきたかということを中心にお話させていただきました。個別には、行政が具体的にどのような仕組みで運営し、特徴あるメンバーを募り、市民への説明責任を果たしているのか等について多くの方から熱心に質問を受け、長野での注目度が高まっていることを感じました。

SILKが設立された2015年に比べ、企業の経営環境は大きく変化しました。企業が社会の持続可能性を目指すことは世界標準となり、社会に無関心であることは企業の存続を揺るがす経営リスクとなる時代です。また、SILKの支援する企業はこれまで「ビジネスを通じて社会課題を解決する」企業が中心でしたが、ここ最近では「社会課題を生まないビジネス」が若い起業家にとって当たり前になってきています。

このような社会の変化の中、地域を超えて社会課題に向き合っている方々と議論したことで、全国的な関心の高まりを感じることができました。

参加者の声

本フォーラムには、当市をはじめ、長野地域連携中枢都市圏の関係自治体の30人近い職員が参加しました。行政職員にとって多様な社会的・地域課題に取り組む企業・団体を直接知ること、話せることは、アンテナを高くしていない限り非常に難しいので、様々な事業者に一度に出会えることは大変貴重な機会となりました。

これを機に、当市では、ジビエ振興に取り組むプロジェクトで株式会社カンプライト様とお仕事をさせていただいたほか、残念ながら台風19号災害の対応のため中止となりましたが、今後の都市整備に関わる主に若手技術職員を対象とした、日本ユニシス株式会社様によるスマートシティーの事例紹介をいただく研修会を企画するなど、参加した職員による具体的な連携の動きが出てきました。また、参加した他の職員からは、「きっかけがあれば登壇企業の方と地域課題の解決に向けてお仕事をしてみたい」という声もあり、職員にとって「ソーシャル・イノベーション」を知るきっかけとなるフォーラムとなりました。

(長野市 主査 白澤 哲也さん)

登壇者一覧

(敬称略・50音順)

名前	所属・役職	内容
秋山 怜史	一級建築士事務所 秋山立花 代表	行政財産活用・女性子ども支援
井上 和馬	株式会社カンプライト 代表取締役	地域資源利用食品加工
小川 晋平	AMI株式会社 代表取締役	遠隔医療、ICT
小野 邦彦	株式会社坂ノ途中 代表取締役	農業
熊野 英介	アマタホールディングス株式会社 代表取締役 会長兼社長	環境・エネルギー
桜井 肖典	一般社団法人リソース 共同代表	コミュニティ支援・エコシステム形成支援
佐別当 隆志	株式会社ADDRESS 代表取締役社長	空き家活用
澤田 哲也	ミテモ株式会社 代表取締役	づくり、ICT
田中 慎	京都市ソーシャルイノベーション研究所 イノベーション・コーディネーター 田中経営会計事務所代表	行政イノベーション
筒井 昭彦	京都市産業観光局商工部地域企業振興課 ソーシャル・イノベーション創出支援係長	行政イノベーション
堀内 奈穂子	特定非営利活動法人 アーツイニシアティブウキョウ 理事	アート
向井 剛志	日本ユニシス株式会社 スマートタウン戦略本部事業開発部長	シェアリング・エコノミー

信州ソーシャル・イノベーションフォーラム 2019 プレイベント

「信州ソーシャル・イノベーションフォーラム2019プレイベント」は、3月下旬から7月上旬にかけて全5回開催。フォーラム開催のPRを主目的とする一連のイベントは、フォーラムへのゲストを事前に県内にお招きしたセミナーや映画上映会などを行いました。

SDGs 開催地/長野市、飯田市	地域おこし協力隊 地域人材の育成 開催地/長野市	エシカル消費 開催地/長野市
教育 開催地/長野市	アートとイノベーション 開催地/佐久市、長野市	

テーマは多岐にわたり、現場に近い自治体のご後援等もいただきながら実施し、内容によりインターネット回線を利用した配信が可能な場合は、遠隔地からでも参加できる環境を整えるようにしました。

「今やなくてはという思いが強くなった。」「よりリアルな課題感を現場で共有できた。」「見えないものを見ようとする努力から始めたいと思います。」といった声寄せられたプレイベント。ひとり一人の変化こそがそれぞれの現場を動かし、大きなうねりにつながる、そんな萌芽があちこちで見られたように思います。



よりリアルな課題感を現場で共有できた。



「地域の人材育成とビジネスエコシステム」

6月28日(金)、地域おこし協力隊として在籍する南信州豊丘村にて、表題となるイベントを長野県立大学の協力のもと企画立案などを担当させて頂きました。ソーシャル・イノベーション創出センターの川地さんからお話を頂いたのをきっかけに数カ月の準備期間を経て当日の開催に至ることができました。私自身も、地域おこし協力隊として地域活性化に取り組むひとりとして、本当に多くの課題を目の当たりにしてきました。協力隊を集めて交流するだけではなかなかイノベーションには至らず終わることが多いことを課題の一つと考え、あえて参加者を、協力隊と自治体担当者セットで参加することを条件に開催しました。地方に移住する人は年々徐々に増えてきてはいますが、現実を見れば、地域や自治体とのミスマッチがその土地を離れる引き金になっているケースも多くみられます。だからこそ、このイベント開催の意義は非常に大きかったと思っています。地域へ移住する者と移住者を受け入れる者、あるいは地域の姿勢ができていなければなかなかマッチングは容易ではありません。



豊丘村
地域おこし協力隊
杉山 豊さん

～地域おこし協力隊の3年後の自立を考える～

今回の登壇者の方は、実際に地域と一緒にビジネスに取り組むミテモ側の代表澤田哲也氏や地域でデザインを生業とするヒトコトデザインの代表小澤純一氏などの視点から地域と移住者や協力隊の定住についてのご意見を頂きました。地域と共に新たなビジョンを描き変革していける土台作りの重要性についてより深く考える機会となりました。私も令和に入り協力隊3年目を迎える中で、このイベントの意志を引き継ぎ、次のステージでは協力隊や移住者が地域と共に活躍できる土台を創るための事業を起こしていこうと考えています。移住定住はただの足元の奪い合いになってはイノベーションなど起こり得るはずがありません。なぜその地域で活動するのか?あるいは、なぜその人がこの地域に必要なのか?を互いに精査し、より適合するマッチングの創出こそが新たな地域づくりにつながるかと私は信じています!

Innovation×SDGs



見えないものを見ようとする努力から始めたいと思います。

Innovation×SDGs ～芸術家 起業家の視点から地域経営を見直す

2019年4月に創設された「長野県SDGs推進企業登録制度」を契機に、長野県でも急速に高まったSDGsへの関心。SDGsを通じて多面的に地域を見るきっかけになりますが、果たしてそういった俯瞰の視点はどうしたら身に付けられるでしょうか?その問いの答えを探るため、7月5日(金)に佐久市で地域課題の最前線に立つ行政職員やパブリックセクターに関わる人を対象に「Innovation×SDGs～芸術家/起業家の視点から地域経営を見直す(後援:長野県佐久地域振興局、佐久市)」を開催しました。地域に密着した領域ほど、さまざまな事象が「そういうもの」や「当たり前」になり、思考が硬直化するおそれがあります。ソーシャルイノベーション、ひいては、俯瞰の視点を持つためにはその人の中の多様性が不可欠です。一つの事象を単一の枠組みを当てはめるのではなく、複数の枠組みでとらえて見ることが、SDGs17の目標達成のほか、さらに複雑化する社会に適応するのに必須の視点であることを学ぶ機会になりました。

ワンコインソーシャルシネマ上映会



「ワンコインソーシャルシネマ上映会」を7月7日(日)に実施しました。上映作品は、「ザ・トゥルー・コスト ～ファストファッション 真の代償～(記号:ユナイテッドビーブル)」。上映と対話を通して、服の製造現場で起きていることや地球環境への高い負荷を考える機会をグローバルマネジメント学部の学生3人とつくることができました。

「服を買う時に大切にしていることは何か。」や映画の感想を参加者同士でシェアするというワークショップの中でたくさんの意見の交流ができて自分もとても視野が広がる会になりました。(グローバルマネジメント学部1年 高橋 郷さん)

活動していくうちに自然と積極性が身に付き、ポスター作成など役割を分担し作業を進め、チームワークを高められていたことに気づきました。次につなげられる反省も生まれたので、この反省を活かすことができるような活動を今後していきたいです。(同1年 小宮 青空さん)

今回の上映会をうまく実施できたのも広報活動に協力してくださったcubblueさんをはじめとする様々な機関の皆様があってこそです。皆さんの初めての経験をすることができました。とても楽しかったです。ありがとうございました。(同1年 佐藤 千愛さん)

SDGs への取り組み



全国初で開始された長野県SDGs推進企業登録制度の第1期登録組織として長野県立大学が登録されました。

長野県SDGs推進企業登録制度はSDGsと組織活動との関連について「気付き」を得るとともに、具体的なアクションを進めるための「登録」制度です。



長野県立大学では、SDGs推進を加速させるため、全学的な取組として、第1期登録組織となることを目指しました。ワーキングチームを発足し、現状の取り組みはどこまで進んでいるのか、どのような目標に取り組んでいくか、議論を重ねた結果として、登録に至りました。登録後は2030年の目標達成に向け、ビニール袋使用の削減、将来的なバイオ燃料使用の検討など、着実に活動に取り組んでいます。

Sustainable



未来を創る食農ビジネス

令和2年2月17日(月)に霞ヶ関で開催された農林水産省主催シンポジウム「SDGs×生物多様性シンポジウム『未来を創る食農ビジネス』」。ネットワーク回線を通じて同時配信される、全国唯一のサテライト会場として本学三輪キャンパスで開催されました。これまでもCSIから県内各地へ何度もサテライト中継配信してきましたが、今回は受信側。今の時代に、遠方に行かずとも近くで最新情報に触れる機会を提供したい、との思いで農林水産省大臣官房政策課環境政策室とCSIの相互協力で実現しました。当日の配信品質には改善の余地がありました。長野からまるで本会場に居るように参加できたことがうれしいとの声も頂きました。引き続きネットワークの強化に努めます。

Ethical

長野県版エシカル消費推進事業調査

リサーチ (調査)



学生がエシカル消費の現場を訪ね、取材するスタディツアー。今年は、飯山、中野エリアに所在する11事業者へ9名の学生が伺いました。自治体の協力も得て、飲食、伝統産業、観光、食品加工、芸術など幅広い分野の事業者を取材させていただきました。業種は違えど、未来に向けて地域をどう繋いでいくのか、持続可能なエコシステムをどうつくるか、といった根源的な問いに向き合われていることが共通項として浮かび上がってきました。

海外技術研修員とのアクション(実践)とプレゼンテーション(成果報告)



長野県国際課では、1972年以降、ブラジル、アルゼンチン、メキシコ3国の長野県人会が推薦する海外技術研修員を受け入れてきました。今年度は、ブラジルから2人の研修員を約半年間受け入れ、そのうちの1人がCSIで7週間、研修しました。その中で、「エシカル消費」を周知するプロジェクトとして、10月2日に研修員が料理講師として参加し、研修員が学生にブラジルの郷土料理を教えながら、全員で4種類の料理を作りました。エシカルな食材を実際に自分達で使用し、かかるコストを知りながら味わうことで、自然とエシカル消費に興味を持つきっかけにもなりました。私もこのイベント以降、買い物をするときに毎回エシカル消費を心掛けるようになりました。参加者全員のエシカル消費に対する意識が高まったのではないのでしょうか。今回、県立大学の皆さんに、ブラジル文化の紹介ができて、研修員にとっても大変有意義だったと思います。ありがとうございました。(長野県国際課 矢口 綾香さん)

参加学生の声

私は、今回の取材に参加させていただくまで、エシカル消費という言葉にあまりなじみがありませんでした。飯山市での二日間の取材を通して、SDGsの目標12「つくる責任 つかう責任」を意識しながら、各事業者様の仕事の内容や生産品に対する思いを伺っていくうち、エシカル消費は私たちでも、意識一つで始めることができると考えるようになりました。特に取材活動の中で、どの事業者様も自分たちが楽しめること、やりたいことをしていらっやったことが、とても印象深かったです。したいことをしていても、少し周りに関心を払うだけで、環境、健康に良い生活を送ることができる、とても魅力的なライフスタイルだと感じました。小さなことですが、最近は国産のものを意識して買うようになりました。(グローバルマネジメント学部1年 倉島 慧灯さん)

長野ミライ会議 × 県立大学コラボ公開講座

「長野ミライ会議×県立大学コラボ公開講座」は、本学学生も参加し、地域の皆さんとともに未来を考える共創的な学びの場です。若手社会人を中心に学びの場づくりを行っている「長野ミライ会議」メンバーとコラボし、本学が目指す「地域に開かれた大学」「地域とともに歩む大学」の一つの取組として行っています。セミナー聴講に加え、参加者同士、時にはゲストも交えた対話の時間を設けています。この進行形式は、時代の先頭を走る企業経営者を県外から招聘し、リアルな経営の現場から未来を見通す「経営者トークライブ」にも活かされています。



Collaboration

長野ミライ会議は、月に1回程度開催されている有志主催の勉強会です。2017年から自分たちが話を聞きたい・学びたいテーマで、ゲストを呼び、25回行ってきました。2018年度からは長野県立大学とのコラボ公開講座として、地域に開かれた共創的な学びの場を目指し、実施中です。2019年度は企画運営に、県立大学の学生をはじめとした5名の新しいメンバーが加わりました。私は、2018年に参加者としてこの講座に通い、2019年から企画運営に関わっています。企画運営に関わりながら、毎回の勉強会では本当に多くのことを学び、感じることができます。特に長野県各地に大きな被害を受けた台風19号後に開催された会は、私の行動を変える大きなきっかけとなりました。災害直後は泥かきに行ったものの、大学の台風19号のボランティア活動に対する特例期間が終わると、再び泥かきに行くことができずにいました。しかしゲストの波多腰さんの「自分はどうか被災地に寄り添いたいのか」という言葉から、今の自分にもできることではないかと立ち止まり考えることができました。その会をきっかけに高校生・大学生が被災地の様子やボランティアの現状を聞いた上で何ができるか考える「高大生災害情報共有会議」に参加したり、友人などに声かけをしてりんごの箱詰めやりんご販売のためのアイデアソンを実施しました。現在は被災者支援に取り組む県内外の学生が宿泊できる拠点「信州ベース」の運営に宿泊者オンライン申し込み等のサポートとして関わっています。

私にとって長野ミライ会議はゲストの話から自分自身が学び参加者の皆さんと一緒にその学びを広げたり深めたりすることによって、自分の次のアクションや近い未来を作れるような場です。2020年も大学や地域の皆さんと一緒に学び、長野のミライをつくるきっかけとなるような場を考えていきたいと思います。(グローバルマネジメント学部2年 川向 思季さん)



コラボ公開講座 開催一覧

日付	タイトル	ゲスト
2019. 5.13	「長野ミライ会議」をデザインする ～今、作りたい場・聞きたい話をプレストしよう～	大宮 透さん 平岡 駿さん 川向 思季さん 藤原 正賢さん 酒井 朝羽さん 間瀬 海太さん 波多腰 遥さん 長野ミライ会議メンバー (五十音順)
2019. 7. 3	地域を舞台にした教育プロジェクトの可能性	園利 一郎さん 学校法人 角川ドワンゴ学園
2019. 8. 2	信州とアジアのつなぎ方を考えよう	山田 崇さん 塩尻市役所
2019. 8. 7	つながりの力で自分の人生を生きるには? 「成人発達理論を実践する5つの旅」を 体験する参加型ワークショップ	町塚 俊介さん
2019.10. 7	「社会を面白くする学生団体・np0のはじめ方」	池本 修悟さん 一般社団法人社会創発塾 代表理事 公益社団法人 ユニバーサル志縁センター 専務理事
2019.12. 3	<緊急開催>台風発生から50日。 いま、私たちができることって何だろう?	阪本 真由美さん 兵庫県立大学減災復興政策研究科准教授 徳永 虎千代さん 長野アップルライン復興プロジェクト 代表
2019.12.13	最初の一步は『マネする』ことから?! ～長野で高校生向けプログラムを4年やって気づいたこと～	関口 真司さん パーソルプロセス&テクノロジー株式会社 所属 一般社団法人ウィルドア 理事 任意団体Bridge School 元代表
2020. 2.21	ティールから考える、トップダウンではない 組織のつくりかた	嘉村 賢州さん 場づくりの専門集団NPO法人場とつながりラボhome's vi代表理事 東京工業大学リーダーシップ教育院特任准教授 コクリ!プロジェクトディレクター

経営者トークライブ開催実績

日付	タイトル	ゲスト
2019.10.16	IKEUCHI ORGANICが挑戦し続ける接続可能性 ～「オーガニックタオル」から20年、サーキュラーエコノミーへの道～	阿部 哲也さん IKEUCHI ORGANIC株式会社 代表取締役社長

※新型コロナウイルス感染症対策のため、2月末から3月開催予定の催事等は中止しました。

包括連携協定



2018年4月に開学した本学は、初年度に長野市、飯山市、千曲市、中野市の4市と包括連携協定を、さらに長野県及び日本ユニシス㈱との3者によるソーシャル・イノベーションに関する連携協定を締結し、次いで2年目となる2019年度には、新たに3件の包括連携協定を締結しました。産・学・官とそれぞれ異なる分野で各々の強みを持つ主体が包括連携協定を結ぶことにより、様々な取組を包括的・継続的に行うことができるようになります。それぞれの得意分野を活かしながら連携して取り組むことにより、今までにない新たな価値を生み出し、地域課題を解決していくことが期待されます。

長野県立大学 × 須坂市

[2019年6月4日]

本学の学生が参加し、須坂市内を探索して地域活性化につながるアイデアを考える「蔵の町並みキャンパス事業」など、学生が関わる事業が実施されました。今後は企業家機能を持った行政職員（パブリック・アントレプレナー）の養成なども検討していく予定です。



長野県立大学 × KDDI 株式会社 × プラットフォーム (NICOLLAP)

3者がお互いに連携しながら、5Gなどの先端技術の地域活用についての共同研究や、地域企業・スタートアップ企業と協業で取り組む地域課題解決、さらにはイノベーション人材や起業家等の人材育成、大学など教育機関における教育の推進などを進めていきます。

一般社団法人

長野ITコラボレーション

プラットフォーム (NICOLLAP)

[2019年11月8日]



長野県立大学 × 長野工業高等専門学校 (長野高専)

本学にとって高等教育機関との初めての包括連携協定となりました。教育研究活動の連携をはじめ、学生間や教職員間の研修や交流、起業や就職等でお互いに協力していきます。お互いに4kmほどしか離れておらず、サークル活動等での学生同士の様々な交流が進むことが期待されます。

独立行政法人

国立高等専門学校機構

長野工業高等専門学校 (長野高専)

[2020年1月31日]

地域と連携した取組

飯山市

地域のエコシステムづくりを支援する「飯山グッドビジネス (飯山GB)」事業に、CSIアドバイザーメンバーで一般社団法人リリースの桜井肖典さん、風間美穂さん、但馬武さんが関わっています。飯山GBの参加事業者の皆さんが各自で考えてきた「地域に必要とされ、歓迎される」ビジネスの構想発表会が10月1日に行われ、発表した参加事業者だけでなく、聴講に訪れた方も含めた広がりあるネットワークを形成する機会となりました。飯山GBでは飯山で活躍するプレイヤー紹介のホームページも引き続き運営されていますので、<https://iiyamagoodbusiness.net/>をぜひご覧ください。また、飯山高校生を対象に長野県北信地域振興局と連携し、「空き家対策」をテーマとして、起業家をゲストに招いたセミナーとフィールドワークを実施しました。



中野市では「わくわく信州なかの100人会議」の企画・運営 (全2回) にCSIが関わり、市民対話から行政計画策定プロセスデザインまで幅広く手がける地域価値共創センターの田坂逸朗氏を招聘していただきました。1回目はワールド・カフェという手法を用い、テーマは「わたしのなかの。もしくは、意外ななかの。」。中野西高校の高校生や本学学生が参加したこともあり、通学前後の有効な時間の使い方、集える場所の必要性、音楽の街としての可能性など幅広く話されました。2回目は、1回目のアイデアを深めるだけでなく、新たな参加者も当事者意識をもって積極的に発言され、さらに突っ込んだ意見交換が行われた結果、一部の参加者同士が主体的に集まろうと声を掛け合う様子も見受けられました。

中野市

県立大と須坂市が包括連携協定

県立大、KDDI(株)、NICOLLAPが包括連携協定

県立大と長野高専が包括連携協定

北信地域おこし協力隊起業塾 (講師)

中野市 わくわく信州なかの100人会議

飯山グッド・ビジネス・ミーティング/ラボ

保健医療福祉専門職起業塾の開催

長野市社会福祉協議会 旧公営住宅物件の活用相談

大北地域三村議会議員交流会研修 (講師)

JC長野ブロック大会 in 北アルプス (パネラー)

千曲市職員等研修 (講師)

SNEC長野 就労支援施設立ち上げへの支援

信州ソーシャル・イノベーション塾2019の開催

信州環境カレッジ×長野県立大学CSI協働講座シリーズ (講師)

信州ソーシャル・イノベーションフォーラム2019の開催

挑戦するエコシステムに向けて 県内各地でさまざまな主体とコラボレーション中!

塩尻市振興公社 全県的なテレワークの仕組みづくり

スナバ 地域ディレクター育成に向けたプログラム開発相談

KISO女性・わか者起業塾 (講師)

ふらっと木曾 地域での学びの企画について打ち合わせ

佐久市/豊丘村 イノベーションフォーラム・イベント

佐久穂町社会福祉協議会 フレイル対策に関する映像化支援

南信エリア 地域おこし協力隊のセミナー講師

日仏学生フォーラム・シンポジウムの実施、留学生受け入れ

エシカルマルシェ&シンポジウムの開催

シニア向け事業の連携

なめし革産業の復興相談

SDGsカードゲーム開催支援

テレワーカー事業の事業計画相談

女性起業家ネットワークの構築相談

町村会事務局 町村会が必要であり続ける組織の在り方

上田高校講演 (講師)

学童保育ひなたぼっこ コワーキングスペース立ち上げ相談

小諸商業高校 地域企業との連携事業成果発表会参加

小諸商業高校 高校生向け起業家教育事業 (審査員)

ビジネスモデル、情報発信の相談

事業承継、地域の人材育成に関する取組打ち合わせ

佐久穂町 教育移住人材の地域での活用

風の学舎 活動の意見交換

根羽村 矢作川上下流域交流業のプロジェクト相談

下伊那農業高校 SDGsについての講演

SDGsについて語ろう会

CINRA×県教委 新しい教育アプリサービスの実証実験
小布施町×日本ユニシス 災害時の情報発信のあり方検討等

ピーシーズ×長野県庁 社会的処方という切り口でモデル事業の検討

地域創生研究所あつまれむらびと CSIと連携するプロジェクトの相談

小布施町×WBS×オムロン オープンイノベーションによる新規事業構築議論

2019 地域コーディネーター活動紹介

瀧内 貫

Takiuchi Toru

北信・中信担当
株式会社コトト 代表取締役
大阪生まれ長野育ち



CSIとしては、聞けば当然となるようなことですが、長野県立大学CSIが担うべき、エコシステムにつながっていく「新しい仕組みづくり」のための「支援」を念頭に、この1年活動してきました。

長野市、飯山市、木島平村、塩尻市、根羽村、木曾町など、本来業務上多く通う地域を中心にさまざまな地域において、SDGsや持続的な仕組みづくりをにらんだ、県内広域のテレワークの仕組みづくりなどのビジネス構築から、これからの暮らしや働きかたを、地域と一緒に学ぶための仕組みづくり、新しい公共のあり方を協働で考えていくことなどを、その地域に暮らす皆さんとともに仕掛けてきました。

そんななかで、集まり、学び、実現していくネットワークを形成すること。仮にファシリテーターがいなくとも、雨後の筍のように自発的にプロジェクトが創出されていく地域を目指すことが重要であると感じます。対症療法的な短期プロジェクトだけでなく、長期的の展望を見据えて、今ワクワクすることを創出することが大切です。

地域コーディネーターは「御用聞き」ではあるものの、地域のさまざまなをつなぎ、形にする、そのイメージを増幅（ジャンプアップ）させる役割があります。来年度も引き続き地域を変えていく、生きづらさを解消するようなインパクトのあるプロジェクト支援に邁進していきたいと思えます。



昨年度に引き続き、今年度も企業、自治体、大学、市民を繋ぎながら、新しいプロジェクトの創出に向けた場づくりやコーディネートに取り組んできました。教育分野では、株式会社CINRAと協働し、高校生や大学生などの若い世代が場所を選ばずに時代の最先端に行く人々の考え方に触れることができる新しいオンラインサービスの可能性やその価値について検討しました。5月には、県立大学後町キャンパスにて県内の高校生や大学生、教員など教育に関わる幅広い層の参加者が集いワークショップを開催し、そこでの議論内容が「InspireHigh」というサービスの実現につながりました。その他にも、長野県が重点施策として取り組む子どもの居場所づくりについて、市民育成プログラムの検討などを進めています。

また、今年度は、長野県によるSDGs推進企業登録制度が創設され、2020年2月時点で200社以上が登録に至るなど、長野県内においても、企業が環境や社会課題にコミットすることの重要性が少しずつ認識されはじめた年になったと感じています。その一方で、推進企業に登録しても、具体的な一歩の踏み出し方を描けていない企業も少なくないでしょう。CSIの地域コーディネーターチームでは、そのような問題意識のもと京都視察を実施し、京都を拠点に、事業を通じて社会課題や環境問題に貢献している企業（「これからの1000年を紡ぐ企業認定」により認定された企業）を訪問し、具体的な取り組みについて、また企業の取り組みを応援する仕組みについて学んできました。次年度のCSIでは、長野県独自の推進企業登録制度を生かしながら、京都で取り組まれている認定制度のように、社会課題や環境問題へのコミットメントが経済的な価値にもつながるような企業事例を県内で発掘・応援し、SDGsに関する具体的な取り組みが長野県内でさらに広がるよう、その仕組みづくりを検討していきます。



大宮 透

Omiya Toru

北信・中信担当
行政コンサルタント
共創コーディネーター
山形県生まれ・群馬県高崎市出身



2019年5月より東信地域の地域コーディネーターを担当しています。私は東京や埼玉でドキュメンタリーや情報番組等映像を制作するほか、映像制作を小中学校の授業で実践し情報発信とメディアリテラシーを学ぶ教育プログラムを開発し学校現場にコーディネートをする仕事をしていました。

子育てをきっかけにコミュニティのあり方に疑問を感じ、地域にコミットした活動をするべく2018年4月に退職し、家族で東信地域に移住して来ました。そして佐久穂町で地域おこし協力隊として移住支援、集落支援を担当するほか、フリーランスで映像制作と映像制作支援をしています。地域では人の物語に寄り添いながら、異なる個性の人材をつなぐプロセスを大事にしている、例えば普段は通り過ぎてしまうようないわゆる「シャッター商店街」も一歩中に入ると、社会の変化に合わせて柔軟に変化しチャレンジし続けている人材との出会いがあります。

2019年に行った地域の古いフィルムを発掘し町のCMを作るプロジェクトでは、若者がフィルムの発掘を通して他者の人生や地域の物語を追体験し、地域の魅力を深く考え発信する機会となりました。

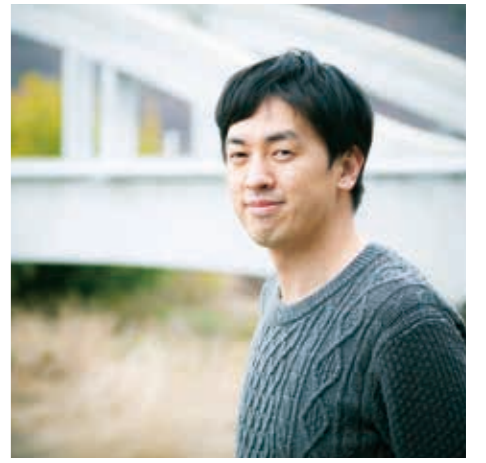
CSIでも自分のキャリアを活かし、学生向けの動画制作講座を行いました。そしてそこで学んだ学生たちが実際に、7月に開催した信州ソーシャル・イノベーションフォーラム2019で起業家たちに動画取材を行いました。取材を通して学生たちは、動画制作のノウハウを学ぶだけでなく、インタビュー対象の起業家たちの事業や活動を深く理解することにつながり、起業家たちの想い、情熱に大きな刺激を受けた様子でした。

東信地域はアクセスの良さから2拠点生活や首都圏人材も参画しやすく、多様で個性的なプレイヤーが集まっています。現在は彼らや地域の課題を先入観なく深く理解すべく地域を歩き、多世代、多分野の話聞いて回っています。多様な人材による協働を促進し地域に結びつけ、個性的でワクワクするプロジェクトを生み出していきたいと思えます。

副島 優輔

Soejima Yusuke

東信地区担当
映像ディレクター
佐久穂町地域おこし協力隊



森本 ひとみ

Morimoto Hitomi

南信担当
森本ひとみ税理士事務所 代表
一般社団法人South-Heart 代表理事
一般社団法人レキップ飯田 理事



「エシカルに生きる」を目標に過ごしたこの1年は、出逢うヒト、モノ、そして気づくことが変わりました。普段何気なく過ごしていくなかで、「これって当たり前のことなの？」と自分に問いかけ、気になると調べたり、実際に見に行ったりと何かが変わりました。

ほんの小さなことかもしれませんがコンビニに行くときにマイバッグを持っていくようになりました。冷たいものにストローがついてきてもストローを使わなくなりました。洋服も自然素材の洋服を着るようになりました。プレゼントにフェアトレードのチョコレートを贈るようになりました。一から百まで人にも地球にもそして環境にも配慮した行動はできていないことはわかっていますが、自分にできるほんのささいなことを変えて来ました。

そんなささいなことを変えただけで、どこか心地いいなと感じる瞬間が増えたように感じます。そんな心地いいと感じることの積み重ねが何十年後かの未来を変えるのではないのでしょうか。

私以外にも「エシカル」に興味をもち、「それって何？」と関心をもってくれる方が確実に増えてきました。それは、2019年4月から1回、定期的に開催している「SDGsについて語ろう会」に参加して下さる方が増えたことありますが、参加した方が、周りの方にお声がけをして口コミでSDGsやエシカルについて発信し、自発的に広げつながっていく姿をみて、これがまちづくりの在り方だと実感しました。この自発的な活動をさらに発展させて定着させるため、「エシカル」の発信を通して、南信州地域のSDGsの推進を加速していけたらと考えています。



組織概要

名称 公立大学法人長野県立大学ソーシャル・イノベーション創出センター
(Center for Social Innovation Initiatives,CSI)

設立 2018 (平成 30) 年 4 月 1 日

所在地 長野県長野市西後町 614-1 (長野県立大学後町キャンパス)

2019 年度 STAFF 大室 悦賀 センター長 /
公立大学法人長野県立大学グローバルマネジメント学部教授・起(企)業家コース長
秋葉 芳江 チーフ・キュレーター /Office SPES 代表
土屋 征寛 課長補佐
川地 尚武
小林 絵美子

制作

瀧内 貫 / 株式会社コトト 本庄 みどり /coco collage
宮下 公一 /studio FRAME

印刷

株式会社アルキャスト (長野県 SDGs 推進企業登録制度 登録企業)



長野県立大学

THE UNIVERSITY OF NAGANO



<http://www.u-nagano.ac.jp/csi/>



<http://www.facebook.com/CSI.nagano/>



長野県立大学は「長野県 SDGs 推進企業登録制度」
第 1 期登録組織です。



お問い合わせ

Email csi@u-nagano.ac.jp

TEL 026-262-1725 FAX 026-262-1726

発行日 2020 年 3 月 26 日

※本誌記載内容の無断転載はご遠慮ください